

## サッカーワールドカップと日本

山中邦夫  
体育科学系教授

日韓共催でおこなわれたアジア初のワールドカップ。今回は第17回大会であった。多種多様な特徴を持つ32チームが世界中から集まり、一つのルールのもと世界一を目指して戦う真剣勝負である。

試合の勝敗には「momentum」や「運」も影響するが、1ヶ月という長丁場では、戦略・戦術的トレーニングで作りに上げた「チームの総合力」がものをいう。自国選手の特徴を最大限に生かして、攻守両局面を有利に戦おうとするため、試合には本当の実力がそのまま出る。そして、今大会でもそれぞれの国に独特なプレースタイルが見られた。得点王ロナウドを筆頭に強力な攻撃力を武器として優勝したブラジル、守護神カーンに代表される完璧な技能と精神的・肉体的強さを見せつけたドイツ、また、精神的な面ではアイルランドの「敢闘精神」も印象深かった。これは民族性のなせる業というべきか。彼らのプレーに現れた意志力は

いったいどこから生まれているのか。そのすごさを感じたのは私だけではないはずだ。

観衆の感動を誘うものは、選手の高い技能だけではない。選手からにじみ出るメンタル面の存在が重要である。

そういう意味からも、本大会参加2回目である日本は、国民の応援という大きな力を得て善戦健闘したといえる。大会前の目標（決勝トーナメント進出・ベスト16）を達成し大成功と思った人も多くいたであろう。しかし、韓国はベスト4まで勝ち進んだ。この両開催国の違いはどこにあったのであろうか。韓国は日本を意識し、さらに、世界へのアピールをより強く意識していた。そして、チーム関係者だけでなく国民全体が「あくまでも勝利を！」と熱望していた。ここが両国の違いであり、過去のワールドカップでのキャリアの差であり国民性の違いであったと思われる。

ところで、私はこの大会が日本でも盛り上がりを見せるのか少々心配していたが、徒勞に終わりホッとした。どこのスタジアムも音と色であふれ返った「お祭り騒ぎ」であった。おもしろさ・すごさ・感動・興奮の感じ方が人それぞれであるように、楽しみ方も多種多様であった。チームや選手にプレースタイルがあるように、サポーターの行動様式にも国それぞれのやり方が見られた。

「No12の選手」として、老若男女の区別無くユニフォームや民族衣装を身にまとい、国旗を振り振り、国歌・応援歌を合唱し、笛・鐘・太鼓を打ち鳴らす。家族連れ・友達同士・恋人同士が声を限りに張り上げて熱狂的に応援していた。

場内の売店では記念のユニフォーム・Tシャツやスナック菓子が飛ぶように売っていた。ジュースの他に、試合開始2時間前からハーフタイムまではビールも売られていた。試合開始まではスタジアムの外でも中でも、サポーター同士が入り乱れ、いろんな種類の人たちが数万人単位で群れていた。それは良いこと・悪いことに関係なく、いつ何が起こるかわからない不確定な要素をはらんでいた。この熱狂的でありながら何となくウキウキとするような雰囲気は、「阿波踊り」や「ねぶた祭り」などの、全国的に有名な、日

本古来のお祭りそのものではないか。そして、試合毎に自分の好きな方のチームのユニフォームを着て大挙してスタジアムに駆けつける、という他の国ではあまり見られない光景。やり方が違っていても、実に日本人的な楽しみ方ではないか。

「踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らにゃ損、損」

たいへんな盛り上がりを見せた裏では、今回も会場案内や交通整理で多くのボランティアが汗を流してくれていたし、例に違わずフーリガンをはじめとする暴動や喧嘩などを取り締まる警備がたいへん厳重であったのである。これも「祭り」の裏と似ていた。

あれから2ヶ月、Jリーグを見ていて感じたのは、あのワールドカップの「祭り」がサポーターのスタイルにも、また選手のプレーにも、残像のように受け継がれているということだ。まだプロ10年目の日本サッカーであるが、地方それぞれの伝統の「祭り」のように、これからしっかりと地元根付いて欲しい。

Jリーグ前期は、ジュビロ磐田が優勝した。翌日の朝刊一面に、「ゴン中山(中山雅史:90.体専)」たちが、優勝カップを前に、肩を組み合い吠えている写真が踊っていた。

(やまなかにお コーチ学)